ミューザ川崎シンフォニーホール
コミュニティ・プログラム 16 年のあゆみから未来を考える

MUZA KAWASAKI SYMPHONY HALL

特定非営利活動法人
東京学芸大こども未来研究所
Gakugei Univ. Children Institute for the Future

はじめに

ミューザ川崎シンフォニーホール（以下、「ミューザ」という）が位置する川崎市は、「川崎市総合計画　第２期実施計画」（2018 年３月）の中で、「音楽や映像のまちづくりの推進」を打ち出しています。施策の方向性としては「誰もが身近に音楽を楽しめる環境づくりと音楽を通した活力と潤いのある地域社会づくりの推進」、「ミューザ川崎シンフォニーホールなどの音楽資源を活かした『音楽のまち・かわさき』の魅力の発信」が挙げられており、ミューザには、音楽によるまちづくりの中心施設としての機能が期待されています。これからの川崎市における文化芸術振興の方向性については、「第２期　川崎市文化芸術振興計画（改訂版）」（2019 年３月）の中で、「文化芸術資源を活かしたまちづくり」、「文化芸術を担う人材の育成」、「誰もが文化芸術に触れ、参加する環境づくり」、「『かわさきパラムーブメント』のレガシー形成に向けた文化芸術活動の推進」の４つが掲げられており、ミューザはこれらに対し、特に「文化芸術の創造拠点としての役割」、「川崎市の魅力発信拠点としての役割」を積極的に果たしていくことが求められています。

ミューザは、川崎市よりホールの指定管理を受け、その期間中の目標として９つの目標を立てています。（「（１）良質で魅力ある公演で、さらに評価を高める」、「（２）音楽文化を創造する斬新な企画で、次代音楽文化を開拓」、「（３）フランチャイズオーケストラとの質の高い協働を展開」、「（4）高水準のホスピタリティと、市民の誇りとなりうる公演」、「（5）市民の晴れ舞台を提供し、音楽の裾野を拡大する」、「（6）市内外の音楽大学や音楽団体との連携」、「（7）市の文化施設、企業、商業施設や教育との連携」、「（8）パラムーブメントの推進」、「（9）アウトリーチによる川崎の音楽文化の振興」）これらの目標には、良質な公演の提供の他、誰もが音楽を楽しむことのできる環境づくりや未来の音楽家を育成する視点も含まれており、そうした目標を達成するための演奏会以外のプログラムを総称して「コミュニティ・プログラム」と位置づけ、2004 年の開館以降、継続的に実施しています。この取り組みは、2016 年に川崎市の施設として初受賞した地域創造大賞（総務大臣賞）へと結実しました。これは「音楽のまち・かわさき」のシンボルとして、地域の魅力を向上させる良質な音楽を提供するのみならず、地域交流・人材育成・音楽教育等のまちづくりの中核を担う多岐にわたる活動が高く評価されたことを意味します。

コミュニティ・プログラムは、ミューザでは「わくわくミューザ」という名称で実施されています。実施にあたっては、地元川崎市のさまざまな音楽資源をはじめ教育機関、商店街や地元企業等と連携をとり、有機的なパートナーシップを組みながらミューザ独自のプログラムを開発してきました。その多岐にわたる活動は、全国の文化施設や団体からも注目を集めています。

本報告書は、2004 年度から 2019 年度の 16 年間、ミューザが実施してきたコミュニティ・プログラムに焦点をあて、その成果を大きく 3 つの視点から振り返り、整理すること

を目的としています。特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所との協働によって多角的な検討を行った成果は、これからも「音楽のまち・かわさき」のシンボルとして文化芸術の創造拠点ならびに川崎市の魅力発信拠点としての役割を果たすための有益なヒントとし、ミューザの「未来」へとつなげていきます。

目次

はじめに 2

1. 2004 年度から 2019 年度に実施したコミュニティ・プログラム.....5
a. 方法 5
b. 結果と考察 5
①参加数とプログラム実施数 5
② 5 つのねらい 6
③対象者 8
④人材活用 10
⑤活動内容 12
c. まとめ.....16

2.　職員へのインタビュー 17
a. 方法 17
b. 結果と考察 17
c. まとめ.....22

3. 保護者へのインタビュー 24
a. 方法 25
b. 結果と考察 25
①シートからの読み取り 25
②オルガンレッスン 26
③ジュニア・プロデューサー 28
c. まとめ.....30

４．まとめとこれから.....32

参考資料 36

参考文献等.....37

おわりに 38

1. 2004 年度から 2019 年度に実施したコミュニティ・プログラム

ここでは、ミューザ川崎シンフォニーホール（以下、「ミューザ」という）が 2004 年度から 2019 年度までの間に実施した計 148 のプログラムを対象とした報告を行います。

a. 方法

2004 年度から 2019 年度の間に実施された計 148 のプログラムについて、それぞれを「①参加数とプログラム実施数」「② 5 つのねらい」「③対象者」「④人材活用」「⑤活動内容」の 5 つの角度から整理のうえ、一覧化しました。

原則、プログラムの名称ごとに一覧に反映しましたが、複数年にわたって継続実施しているプログラムについては、実施された年によってその内容が一部変更されている場合も認められたため、その場合は同じプログラム名称であったとしても、参加者に提供される活動の質に変化がみられるという理由から、その違いが分かるように独立したプログラムとして考えました。

以下、 5 つの整理に従って、報告を行います。

b. 結果と考察

①参加数とプログラム実施数

各プログラムに参加した人数ならびに団体数を合計したものを「参加数」とし、2004 年度から 2019 年度の間の「参加数」ならびに「プログラム実施数」の推移をまとめたところ、表 1-1-1 のようになりました。

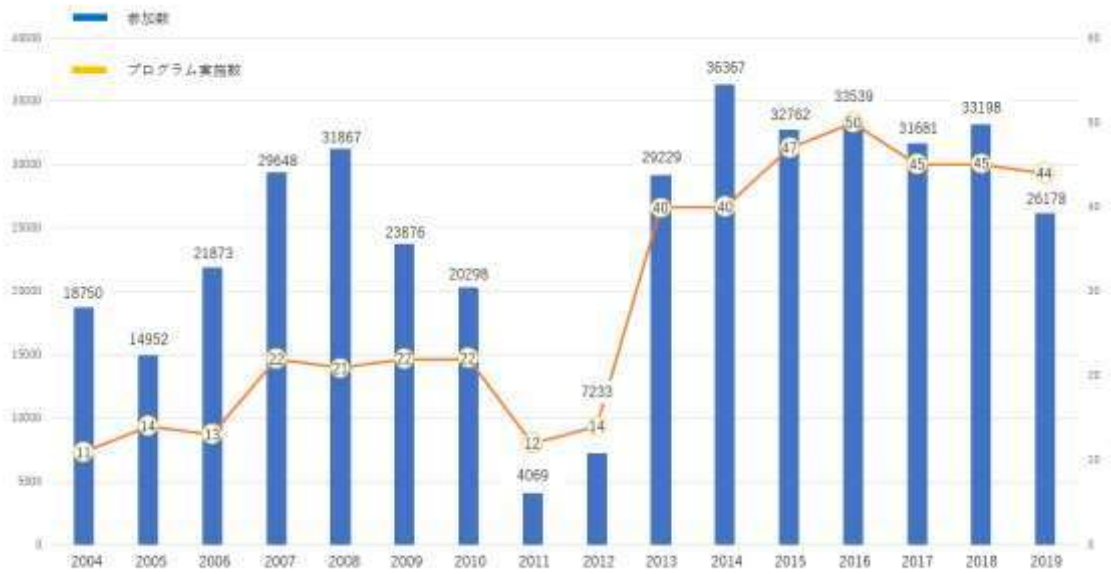


表 1-1-1：参加数とプログラム実施数の推移

表 1-1-1 から、2004 年－2010 年の間には参加数ならびにプログラム実施数は緩やかな上昇傾向を見せる一方で、2011 年－2012 年にて一時的な減少が認められ、その後、2013 年ではプログラム実施数は約 3 倍の上昇、併せて参加数の増加も見られ、以降参加数とプログラム実施数が保持されていることが読み取れます。

2004 年からの推移を見ていく中で、2011 年－2012 年は特徴的であり、この 2 年間は東日本大震災による影響を受けた年でした[1]。この 2 年間は 2004 年から 2010 年ならびに 2013 年以降と同条件でのプログラム実施がかなわなかったという理由から、本報告書では 2004 年から 2019 年を 3 つの期（第Ⅰ期を 2004 年－2010 年、第Ⅱ期を 2011 年－2012 年、第Ⅲ期を 2013 年－2019 年）に分けて考えることとしました。以降、本報告書においてはこの分け方に沿ってミューザのプログラムの特徴を見ていくことにしますが、とりわけ、各期の特徴を比較して考える際には、第Ⅰ期（震災前）と第Ⅲ期（震災後）を比較していくことにします。

第Ⅰ期ならびに第Ⅲ期の参加数とプログラム実施数の平均（小数点第一位を切り上げ）は表 1-1-2 の通りでした。

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
参加数	**23038**	**31851**
プログラム実施数	**18**	**44**

表 1-1-2：第Ⅰ期、第Ⅲ期における参加数とプログラム実施数の平均

ここからは、参加数、プログラム実施数の平均が共に、第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて増加が見て取れ、特に第Ⅲ期では、第Ⅰ期に比べてプログラム実施数の平均が 2 倍以上の値に増加していることが特徴的と言えます。

ここでは、参加数とプログラム実施数に着目することで、ミューザ開館以降の 16 年間を 3 つの期に分け、第Ⅱ期は自然災害の影響からプログラムの活動縮小があったことが見られました。また第Ⅰ期と第Ⅲ期を比べた際には、参加数ならびにプログラム実施数の平均はいずれも第Ⅲ期にて高い値になっており、このことから、第Ⅲ期では第Ⅰ期よりも多様なプログラムを、多くの参加者に機会提供できていると考えられます。

②５つのねらい

「わくわくミューザ」では、プログラムの実施を通して目指していくこととして３つの柱を掲げています（「地域の拠点」「音楽・教育・未来」「シビックプライド」）。さらに「地域の拠点」では個人間のみならず、企業や団体、教育機関等の連携を図り、その活

[1] 「リニューアルまでのあゆみ ～ミューザが再び響くまで～ 2 年間のあゆみ」（https://www.kawasaki-sym-hall.jp/special/renewal2013/history/）では、2011 年 3 月 11 日以降、代替公演やイベント実施にかけたミューザの想い、アーティストから寄せられたメッセージが紹介されています。

動発信の場となることを目的とした**「街とのかかわり」**、**「ホールの役割」**、「音楽・教育・未来」では生涯を通じて音楽と関わりあうための参加者個人の充実した体験創出を目的とした**「活動を通した学びの場」**、**「人材育成・交流」**、「シビックプライド」では「音楽のまち・かわさき」のシンボルとしてクラシックに限らず様々なジャンルのトップアーティストが集うことでホールへの親しみ、まちへの誇りや愛着形成に寄与することを目的とした**「シビックプライドの醸成」**というように、3つの柱を達成するための「5つのねらい」も立てられています。

これら「3つの柱」と「5つのねらい」は、2019 年度の報告書にて確立されたものですが、開館当初よりこのようなねらいに沿ったプログラムの企画がミューザ内で意図されていたこともあり、ここではまず、ミューザがこれまでに実施した 148 のプログラムについて、各プログラムに「5つのねらい」の考え方が含まれているかどうか検証を行い、その結果、148 のプログラムすべてに「5つのねらい」が 1 つ以上含まれていたことが確認されました。そこで、ここでは各ねらいが含まれるプログラムが年間を通して何回実施され、その数の推移に着目することとします。

「5つのねらい」について、各ねらいが含まれた活動が年間何回実施されたのか、その推移と（表 1-2-1）、各ねらいの含まれたプログラム実施数の期ごとの平均（小数点第一位を切り上げ）を示した表（表 1-2-2）は次のようになりました。

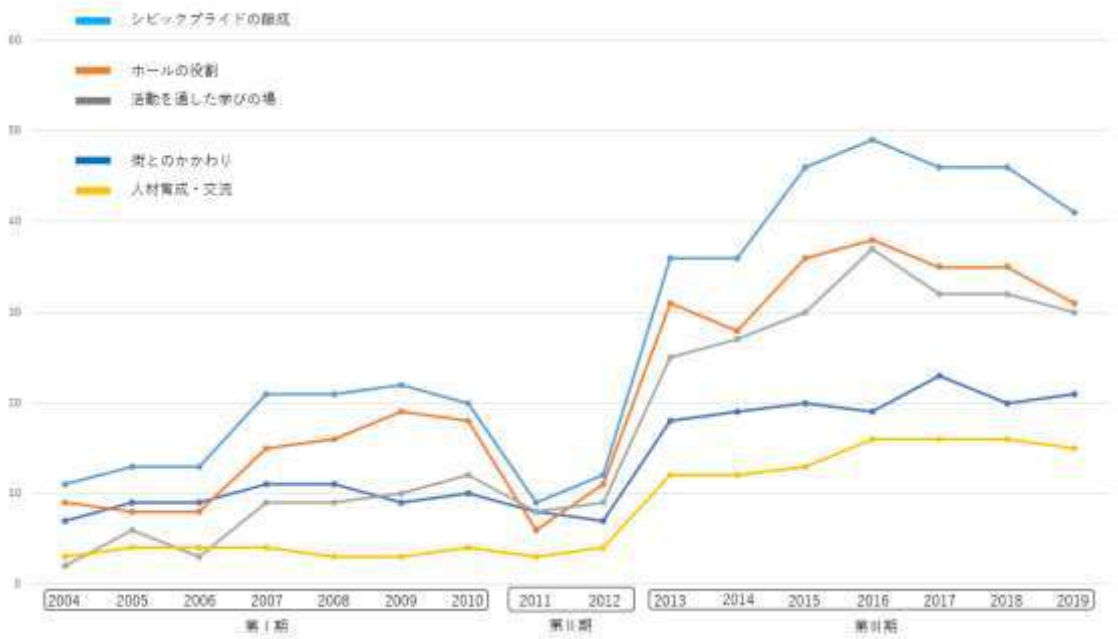


表 1-2-1：「5つのねらい」に焦点をあてたプログラム実施数の推移

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
シビックプライドの醸成	**17**	**43**
ホールの役割	**13**	**33**

活動を通した学びの場	7	30
街とのかかわり	9	20
人材育成・交流	4	14

表 1-2-2：第Ⅰ期、第Ⅲ期において各ねらいの含まれたプログラム実施数の平均

第Ⅰ期と第Ⅲ期を比較した場合、第Ⅰ期では多くともプログラム実施数が 20 周辺で推移していたのに対し第Ⅲ期では 50 周辺での推移に増加していること、また第Ⅲ期では、各ねらいの含まれるプログラム実施数の平均値の全体的な増加がみられ、特に「シビックプライドの醸成」、「ホールの役割」、「活動を通した学びの場」については平均 30 以上の値となっている点で特徴的と考えられます。

ここでは「５つのねらい」に着目することで、開館以降、ミューザが実施してきた 148 のプログラム全てにおいて「５つのねらい」の考え方が含まれていたこと、また第Ⅲ期においては第Ⅰ期と比べて「シビックプライドの醸成」、「ホールの役割」、「活動を通した学びの場」の含まれるプログラム実施数の平均値の高さが特徴的であり、ここから「音楽のまち・かわさき」のシンボルとしての機能を果たすこと、公共ホールとしての役割を果たすこと、豊かな学び体験を提供していくことの意識の高まりが推察されます。

③対象者

ミューザでは、プログラムの参加対象者を 12 分類し、対象者ごとの特性に合わせたプログラムの企画、実施を行っています。（「**0 歳～3 歳**」、「**4 歳～6 歳**」、「**小学校 低学年**」、「**小学校 中・高学年**」、「**中学生**」、「**高校生**」、「**大学生**」、「**若手**[2]」、「**保護者**[3]」、「**友の会**[4]」、「**教員**」、「**大人**[5]」）。ここでは、各対象者を想定したプログラム実施数の年間推移をみるために表 1-3-1 を作成、ならびに第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均をみるために表 1-3-2 を作成しました（小数点第一位を切り上げ）。なお表 1-3-1 では、表 1-3-2 の結果から、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均が 20 以上であった「小学校 中・高学年」（橙色）、「中学生」（青色）、「小学校 低学年」（緑色）、「大人」（赤色）のみに色を付け、特に注目することとし、その他は黒色で表示することとしました。

[2] 若手演奏家や、劇場・音楽堂等の今後を担う若手人材を指します。

[3] 親子一緒に参加できるプログラム等にて子どもと一緒に参加する方を指します。

[4] ミューザに年会費を収めている会員を指します。

[5] 「若手」、「保護者」、「友の会」、「教員」のいずれにも該当しない大人を指します。

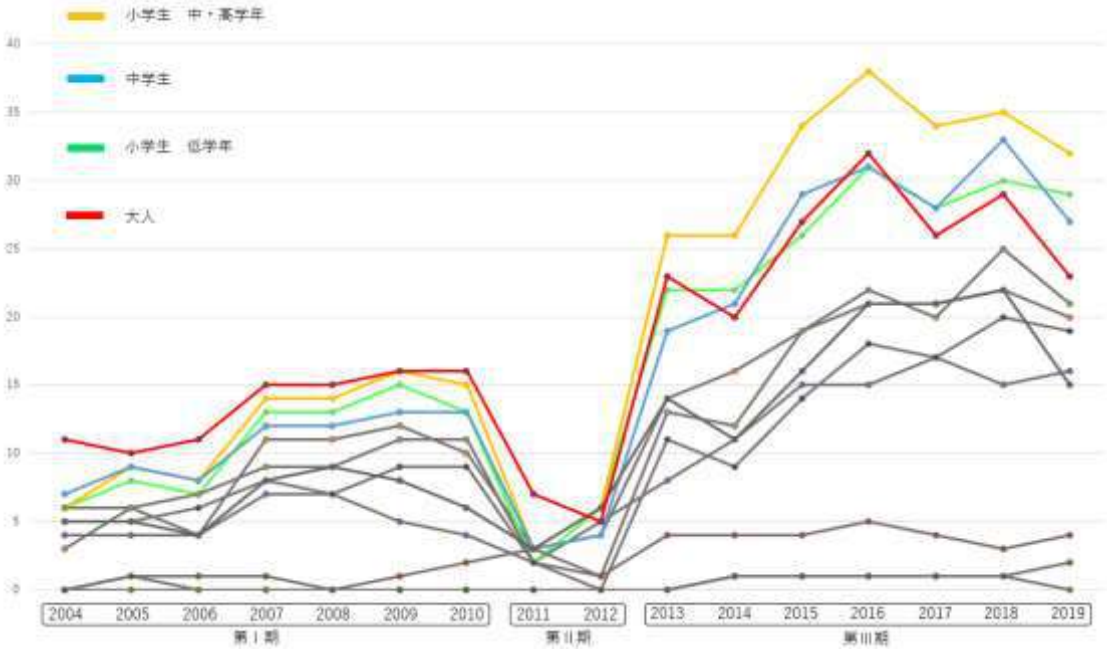


表 1-3-1：対象者ごとのプログラム実施数の推移

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
0 歳～3 歳	5	14
4 歳～6 歳	8	19
小学校 低学年	11	27
小学校 中・高学年	12	32
中学生	11	27
高校生	8	19
大学生	7	15
若手	1	4
保護者	6	17
友の会	0	1
教員	0	1
大人	13	26

表 1-3-2：**第Ⅰ期、第Ⅲ期における対象者別のプログラム実施数の平均**

第Ⅰ期と第Ⅲ期を比較した場合、第Ⅲ期では、対象者別のプログラム実施数の平均値が全対象者において上昇していることが読み取れます。また、特に「小学生　中・高学年」はプログラム実施回数の平均値が 32 と最も高い値になっており、それに続いて「小学校低学年」「中学生」「大人」が高い値になっています。

「わくわくミューザ」では、「ミューザが目指す、市民と音楽のかかわり合い」を次の

ように示しています（図 1-1）。

図 1-1：ミューザが目指す、市民と音楽のかかわり合い

ミューザでは、プログラムを通して提供したい市民と音楽のかかわり合いを対象者ごとに設定しており、その実現に向けて、効果的なプログラムの企画・実施がなされています。これらを表 1-3-1、表 1-3-2 の読み取りと総合して考えると、第Ⅲ期では第Ⅰ期と比べて全ての対象者への音楽のかかわり合いの機会増加が見られること、また「主体的に音楽活動と関わる」こと（小学校 中・高学年）、「鑑賞や演奏へのはじめの一歩」を踏みだすこと（小学校 低学年）、「社会における音楽文化のありようを知る」こと（中学生）、「地域で音楽文化を広めていく担い手・聴衆」（大人）を育てることについて特に意識が向いていることが考えられます。

④人材活用

ミューザのプログラム実施においては、参加者と直接関わり合い、司会やファシリテーターをするなどのコミュニケーター相当の役目を「**企画部スタッフ**」、「**舞台スタッフ**」、「**管理部門**[6]」、「**東京交響楽団**」、「**内部アーティスト**」、「**外部アーティスト**」、「**外部スタッフ**[7]」、「**ワークショップ参加者**[8]」、「**連携先**[9]」の 9 種類の人材が担っています。ここでは、それぞれの人材が関わったプログラム実施数の年間推移（表 1-4-1）ならびに第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均（表 1-4-2、小数点第一位を切り上げ）をみていくことにします。なお表 1-4-1 では、表 1-4-2 の結果から、第Ⅲ期におけるプロ

---

[6] レセプショニストや管理課、広報課等に所属するスタッフを指します。

[7] アルバイト等、一時的に協力を得られたスタッフを指します。

[8] 一部のプログラムでは、参加者自身が他の参加者に対し活動を提供する立場になった場合が確認されたため、独立した分類として認めることとしました。

[9] ミューザ外の企業や団体、教育機関等との連携によってプログラムが実施された場合が確認されたため、ここではその連携先のスタッフを指します。

グラム実施数の平均が 15 以上であった「ミューザ　企画部スタッフ」（橙色）、「外部アーティスト」（緑色）、「連携先」（青色）のみに色を付け、その他は黒色で表示することとしました。

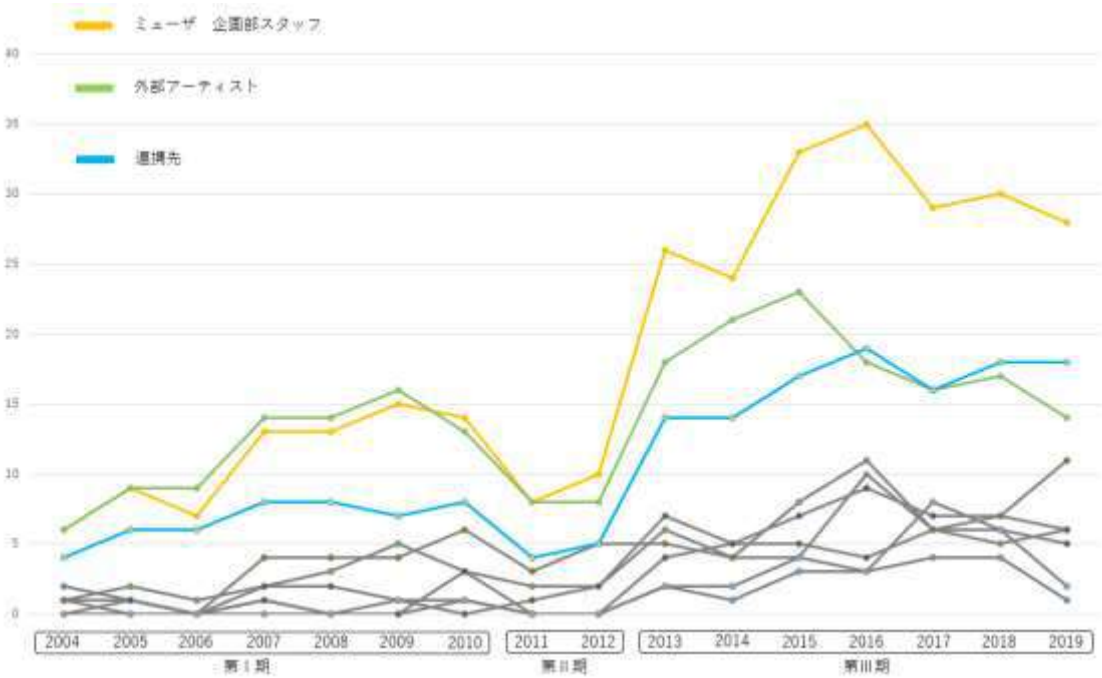


表 1-4-1：人材別のプログラム実施数の推移

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
企画部スタッフ	11	29
外部アーティスト	12	18
連携先	7	17
外部スタッフ	3	7
内部アーティスト	2	7
管理部門	1	6
東京交響楽団	1	5
ワークショップ参加者	0	4
舞台スタッフ	1	3

表 1-4-2：**第Ⅰ期、第Ⅲ期における人材別のプログラム実施数の平均**

第Ⅰ期と第Ⅲ期を比較した場合、第Ⅲ期では、人材別のプログラム実施数の平均値が全人材において上昇していることが読み取れます。また、第Ⅰ期ならびに第Ⅲ期では、プログラム実施を行う人材は「企画部スタッフ」、「外部アーティスト」、「連携先」が他人材と比べて高い値である一方で、第Ⅲ期では「企画部スタッフ」のプログラム実施数の平

均値が突出していることは特徴的と言えます。

これらのことから、第Ⅰ期と第Ⅲ期を比較することで、第Ⅲ期では９つの人材それぞれがプログラム実施を通して参加者と直接触れ合うコミュニケーターとしての機会増加が認められました。また第Ⅲ期においては企画部スタッフがプログラム実施の中心を担っている一方で、その次に外部アーティストや連携先がプログラム実施を担っていることから、外部人材との積極的な連携のうえでプログラムを実施することがミューザの１つの特徴として考えられます。

⑤活動内容

ミューザはこれまでに、多様な活動内容によって構成されているプログラムを計 148 種類実施してきました。それぞれのプログラムを構成する活動内容を抽出・整理した結果、「鑑賞」、「演奏」、「音との触れあい[10]」、「創作」、「指揮者体験」、「解説を聞く」、「仲間と一緒に考える」、「作る[11]」、「ホール内外を見学する」、「飲食する」、「企画する」、「仕事体験をする」の 12 に整理をすることができました。ここでは、これら活動内容の視点から見ていくこととします。

まず、抽出された 12 の活動内容を、「演奏」、「鑑賞」、「音との触れあい」、「創作」、「指揮者体験」については「直接的な音楽活動」とそれ以外の「間接的な音楽活動」の２種類に分け、それら種類別のプログラム実施数の推移（表 1-5-1）と第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均（表 1-5-2）を示したものが次の表になります。

---

[10] 例えば「0 歳からのミニコンサート」では生演奏を聴くだけでなく、音に合わせて自由に身体を動かすことができるような活動を取り入れており、ここでの「音との触れあい」とは、このような参加者が音を全身で捉えつつ、自由な表出活動を行っていくことを意味しています。

[11] ここでの「作る」とは、例えば「エコ楽器作り」や「紙パイプ作り」など、造形活動を行っていくことを意味しています。

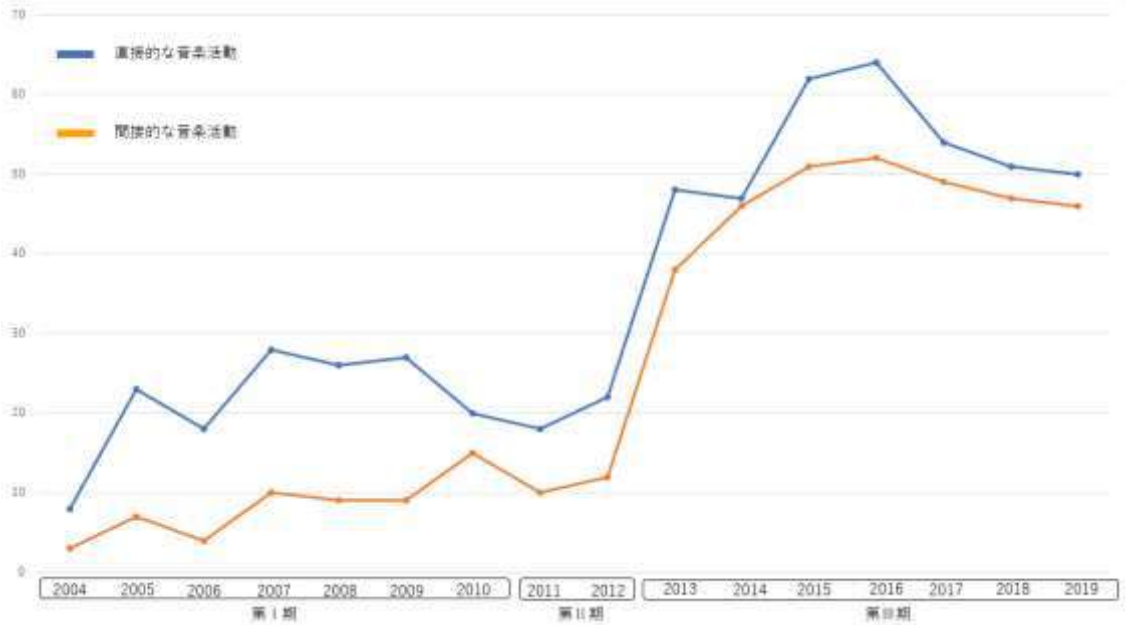


表 1-5-1：**活動種類別のプログラム実施数の推移**

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
直接的な音楽活動	**21**	**54**
間接的な音楽活動	**8**	**47**

表 1-5-2：**第Ⅰ期、第Ⅲ期における活動種類別のプログラム実施数の平均**

第Ⅰ期と第Ⅲ期のプログラム実施数の平均値を比較した場合、第Ⅲ期では、「直接的な音楽活動」の値は第Ⅰ期と比べて 2.5 倍の値へ増加が認められたのに対し、「間接的な音楽活動」の値は 5 倍以上の値へ増加が認められる点で特徴的です。また、第Ⅰ期では「間接的な音楽活動」よりも「直接的な音楽活動」の方が、プログラム実施数の平均値が大きく上回っていたことが読み取れますが、第Ⅲ期では両者が 50 前後の値になっており、「間接的な音楽活動」が「直接的な音楽活動」に並んで実施されている点が読み取れます。

さらに、「直接的な音楽活動」に含まれる「鑑賞」、「演奏」、「音との触れあい」、「創作」、「指揮者体験」の 5 つの活動内容別にプログラム実施数の推移（表 1-5-3）ならびに第Ⅰ期、第Ⅲ期における各活動の含まれるプログラム実施数の平均（表 1-5-4）を示したものが次の 2 つの表になります。

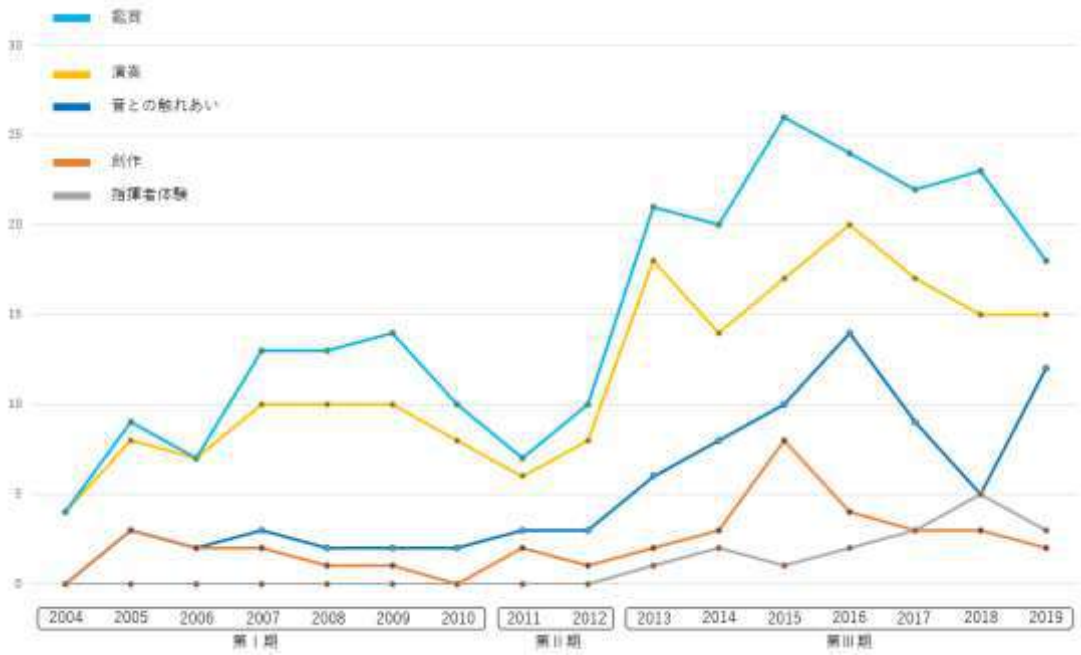


表 1-5-3：**「直接的な音楽活動」に含まれる活動内容別のプログラム実施数の推移**

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
鑑賞	10	22
演奏	8	17
音との触れあい	2	9
創作	1	4
指揮者体験	0	2

表 1-5-4：**「直接的な音楽活動」に含まれる活動内容別の第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均**

活動内容ごとのプログラム実施数の年間推移をみると、2004 年以降、「鑑賞」と「演奏」が常に上位を占めているのに加え、特に「鑑賞」と「演奏」は第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均値が他に比べて約 2 倍以上の値となっていることから、「鑑賞」と「演奏」は「直接的な音楽活動」の中心的な位置づけであると考えることができます。

また、「間接的な音楽活動」に含まれる「解説を聞く」、「仲間と一緒に考える」、「作る」、「ホール内外を見学する」、「飲食する」、「企画する」、「仕事体験をする」の 7 つの活動内容別にプログラム実施数の推移（表 1-5-5）ならびに第Ⅰ期、第Ⅲ期における各活動の含まれるプログラム実施数の平均（表 1-5-6）を示したものが次の 2 つの表になります。

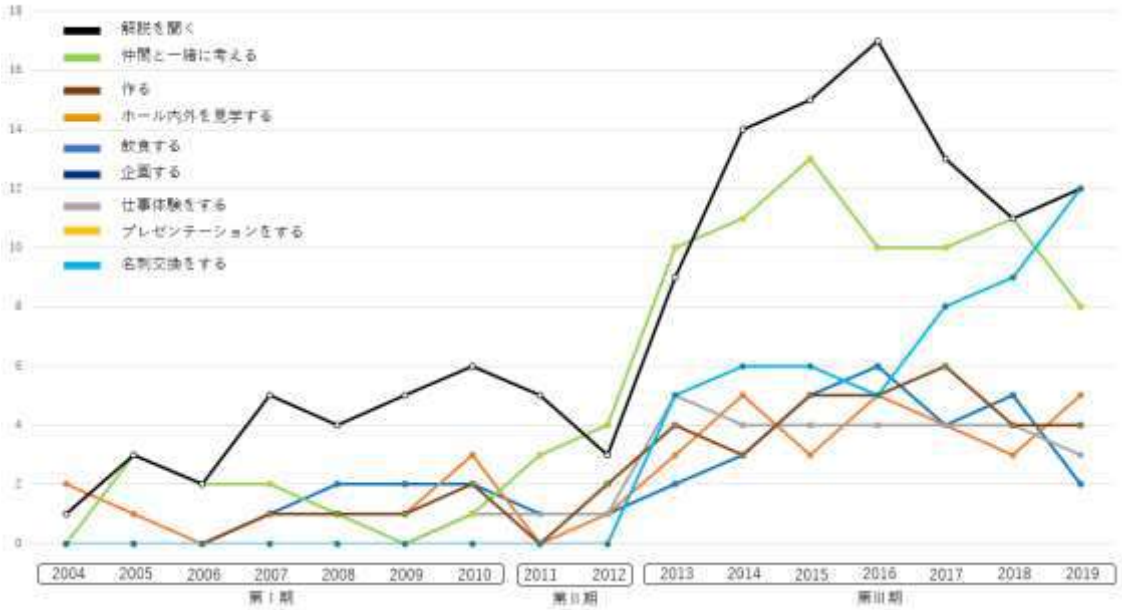


表 1-5-5：**「間接的な音楽活動」に含まれる活動内容別のプログラム実施数の推移**

平均	第Ⅰ期（2004-2010）	第Ⅲ期（2013-2019）
解説を聞く	4	13
仲間と一緒に考える	1	10
企画する	0	7
ホール内外を見学する	1	4
飲食する	1	4
作る	1	4
仕事体験をする	0	4

表 1-5-6：**「間接的な音楽活動」に含まれる活動内容別の第Ⅰ期、第Ⅲ期におけるプログラム実施数の平均**

第Ⅰ期と第Ⅲ期のプログラム実施数の平均値を比較した場合、第Ⅲ期ではどの活動内容においても、第Ⅰ期よりも値が増加していることが読み取れ、特に「解説を聞く」、「仲間と一緒に考える」、「企画する」については第Ⅲ期において他の活動内容と比べ高い値となっていることから「間接的な音楽活動」の中心的な位置づけであると考えられます。

これまでの視点を総合すると、まずプログラムの活動内容をその種類別に見た場合、「直接的な音楽活動」ならびに「間接的な音楽活動」は、ともに第Ⅰ期に比べて第Ⅲ期のプログラム実施数の平均値が高く、第Ⅰ期では「間接的な音楽活動」よりも「音楽的な音楽活動」の方がプログラム実施数の平均が大きく上回っていた一方で、第Ⅲ期では両者が 50 前後の値になっていることから、「間接的な音楽活動」について、第Ⅲ期での重要度の高まりが見て取れます。また、「直接的な音楽活動」においては「鑑賞」と「演奏」が第

Ⅰ期ならびに第Ⅲ期での中心的な位置として一貫されていたのに対し、「間接的な音楽活動」においては「解説を聞く」、「仲間と一緒に考える」、「企画する」が第Ⅲ期において中心的な位置になったことは特徴的です。ここから第Ⅲ期では、音楽作品や楽器に関する解説を行うという公共ホールならではの専門性を発揮した活動内容のみでなく、参加者とアーティスト、また参加者同士が交流し、主体的な意見交換を行うことで「教える－教えられる」という関係性とは異なる「学び合い」という関係性の創出へもミューザの意識が向いていることが考えられます。

c. まとめ

ここでは、ミューザが 2004 年の開館以来、2019 年度までに実施してきた計 148 のプログラムを対象として、5つの視点からその特徴を見てきました。2004年から2010年まで、参加数ならびにプログラム実施数は緩やかな増加傾向が見て取れる中、2011 年に発生した東日本大震災の影響により一時的にホールが使用不可能となったことは、2013 年以降のプログラム実施に関して、ミューザ内に大きな意識的な変化をもたらしたと考えられます。それは第Ⅲ期が第Ⅰ期と比べて、4 つの点で特徴的であることに裏付けられます。

1 つ目は、第Ⅰ期と比べて第Ⅲ期のプログラム実施数の平均値が 2 倍以上の値になっており、第Ⅲ期では多様なプログラムを提供することでより多くの方と関わりあう機会を持ちたいという意識が表れている可能性が挙げられます。2 つ目は「5つのねらい」について、第Ⅰ期と比べて第Ⅲ期では特に「シビックプライドの醸成」、「ホールの役割」、「活動を通した学びの場」を活動の目的に含むプログラム実施数の平均値の高さが特徴的であり、これは震災による休館を経て、「音楽のまち・かわさき」のシンボルとしての機能を果たすこと、公共ホールとしての役割を果たすこと、豊かな学び体験を提供していくことの意識がミューザ内で高まっていった可能性を示唆しています。3 つ目はプログラムの実施を担う人材について、第Ⅰ期においてもその上位は「企画部スタッフ」、「外部アーティスト」、「連携先」であったが、第Ⅲ期において、「企画部スタッフ」がプログラム実施の中心的存在でありつつも、それに続いて「外部アーティスト」、「連携先」がプログラム実施を担っていくというスタイルが確立されたことから、ミューザは外部人材との積極的な連携の上でプログラムを実施していくという意識が可視化された可能性が考えられます。4 つ目は活動内容について、「間接的な音楽活動」のプログラム実施数の平均値が第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて大きく増加したことは特徴的であり、ここから音楽作品や楽器に関する解説を行うという公共ホールならではの専門性を発揮した活動内容のみでなく、「学び合い」という、参加者とアーティスト、また参加者同士がお互いを尊重し、対等な立場での主体的な意見交換を行うことで生まれる関係性の創出へもミューザの意識が向いていることが考えられます。

以上のことから、ミューザは第Ⅲ期において、第Ⅰ期とは異なる特徴が確認され、それは震災による意識的変容が背景にあったことが示唆されました。

2. 職員へのインタビュー

ここでは、ミューザ職員へのインタビューを通して、プログラムの企画、実施を支えている考え方とプログラムの実施によって得られた成果を確認していきます。

a. 方法

プログラムの企画、運営に深く関わっているミューザの職員 5 名の協力を得て、2019 年 12 月 18 日（水）10 時 30 分～12 時にグループインタビューを実施しました。質問者は小田（東京学芸大こども未来研究所）が担当し、質問事項はあらかじめ用意の上、当日のインタビューの進み具合に応じて柔軟な進行を行っていく方法を採用しました（半構造化面接）。

インタビューでの発言はボイスレコーダーにて記録し、文字起こしを行った後に、発言された文脈ならびに文意を配慮の上、要素の整理を行いました。

b. 結果と考察

インタビューの結果から、ここでは「企画から実施に至るまでの流れ」と「プログラムの実施」の大きく 2 つに注目し、以下、内容ごとに発言の抽出とそこからの読み取りを報告します。

企画から実施に至るまでの流れ

ミューザ内でのプログラムの企画、実施を支えている考え方を見ていくにあたって、まず企画が生まれる土台となる職場の雰囲気に関する内容として、以下の発言がありました。

> *上司がフラットな方なので、なにか気づいたら言ってね、また、本当に小さなことでも良いからね、と言ってくれたことがありました。本当にフラットな職場なんだと思いました。*

> *個人で考えていても実現はできないと感じています。誰かが急に思いついて実施となっても誰もついてこないと思うので、チーム事業課で推進している意識はある。新しいことをしようとする時に、困っているとか悩んでいる人がいたら、声をかけようという雰囲気があるとも思います。。あとはやはり舞台さんも、突然伝えても動いてくれないため、普段からのコミュニケーションの大切さを感じています。*

> *良い関係だからこそできていると思います。舞台さんは別の会社ですが、3 者が連携しやすいよう、上司がそういう雰囲気にしてくれているのかもしれないとも思います。。*

ミューザは人間関係の良さだけで成り立っているとも感じます。

職場の雰囲気を知るきっかけとして、「フラットな職場」、「チーム事業課で推進している意識」、「人間関係の良さ」というキーワードが挙がりました。スタッフ一人一人が対等な立場で悩みごとを気軽に相談したり、助けあうことのできる雰囲気があること、それは「プログラムは一人では実施できない」という「協力することの大切さ」への意識から醸成されていると考えられます。

次に、このような職場の雰囲気をミューザにおいて、新しい企画が生まれるきっかけについては、以下の通り、発言がありました。

今、来年の新しいプログラムを一つ準備しているのですが、ペーパーにはしますが、決まったフォーマットは無く、割と自由に生み出されていきます。

「こういうのやりたいからやっちゃいますね～」と言ったらできるような側面もあります。プログラムの内容は担当者の自由にさせてもらいますという感じでしょうか。

指示があるわけでもないのに、もう勝手にやるつもりで、当初からこの回はワークショップありますというところがあります。

書類をつくることよりも大切なのは「自分が最後まで実現させれるかどうか」、「やりきれるかどうか」。

ここではスタッフ一人ひとりの意思を尊重する職場環境の柔軟さ、手続きの簡素さの他、「自由に」、「言ったらできる」、「担当者の自由にさせてもらう」、「指示があるわけでもないのに、もう勝手にやるつもり」というスタッフが主体的かつ積極的にプログラムの企画を行っていることが読み取れます。そのため、ミューザの実施するプログラムはスタッフの特性が色濃く反映されていると考えられます。また、スタッフの意識としては主体性のみならず、「自分が最後まで実現させれるかどうか」「やりきれるかどうか」という責任の視点も含まれており、ミューザのスタッフは主体性と責任のバランスを取りながら企画を行っていると言えます。

新しい企画が生まれるきっかけには、以下のような発言もありました。

震災による休館中、もっとプログラムをやった方が良いよって声がなんとなくあがってきたんです。それまでは「こどもフェスタ」と「楽器体験」、「ミニコンサート」、「ワークショップ」を実施していたのですが、「今、ホールも無いし、色々やってみたら」という話から、「もっとやった方が良い、もっとやった方が良い」とな

り、秋と冬にも実施したりして、という風にプログラムがだんだんと増えていきました。

震災の時に天井が落ちたというのは、イメージが悪いと思いました。ホールに人を戻すためには、まず子どもとか地域の人に通ってもらわなければいけないと思いました。オペラの合唱で入ってもらうことも考えました。

参加型のプログラムをあまり実施していなかったこともあり、実施しなければいけないという話もありました。関わりあいを増やしていくと申しますか、お客さんと私たちではなく、お互いが交流するという場を設けなければいけないという話です。

ミューザでは「相互交流」のようなものをずっと重視していましたね。その頃から、「社会包摂」というワードが出てきて、社会の求めるもの、国が求めるものと、我々がなんとなく実体験に基づいて必要だと感じ始めたことが一致したのかなっていう気もします。

2011 年 3 月に発生した東日本大震災の影響を受け、ミューザは 2 年間、ホールが使用不可能な状態となりました。「震災による休館中、もっとプログラムをやった方が良いよって声がなんとなくあがってきた」ことから、プログラム数がだんだんと増えていったこと、そしてその背景にあった想いとして「ホールに人を戻すためには、まず子どもとか地域の人に通ってもらわなければいけない」という意識が見て取れます。またその際に、どのような内容のプログラムを増やしていくのかについては、ミューザはかねてより「相互交流」というものを重視しており、この機に「お客さんと私たちではなく、お互いが交流する」という「関わりあい」の場をさらに設けていくことにつながっていったことが分かります。このように、東日本大震災の影響を受けた休館という危機的事態に対しても、この状況がプログラムの企画へのアクセルとして機能し、かねてより大切にしたいと考えていた「関わりあい」の場の機会創出へと意識が向いたことは、困難な局面すらも新しい企画の生まれるきっかけとして活用していることが読み取れます。

ミューザでは、これまで見てきたような背景や機会の中で企画が生み出されている一方で、アイデアを得たところから実施するまでの間には慎重な検討を重ねています。それらについて、以下のような発言がありました。

お仕事体験みたいことが流行っていた時期があるのですが、表面的なお仕事体験であれば他でも十分な機会がありましたし、ミューザでしかできないことは何だろうと考え、その時はいろいろな人に相談に行きました。

いろいろな人に意見を聞いて、みなさん多分こうした方が良いという案がいっぱい

あり、どうしようかってなりました。「こうした方が良いんじゃない？」というのもすごく他の企画でも言ってくださるので、ありがたい。「あぁ、そういう案があるか」、「そういう案もありますね」など。聞く人ごとに新しい案が浮いてきて、「あぁ、それね、そっちでやれば良かったね」みたいなのがいっぱいあるのは、毎回ドラマです。

ミューザ内には、企画を担当するスタッフのみでなく、ホールオルガニストをはじめとした多様な専門家がいることから、それぞれの視点を取り入れながらアイデアを磨いていく環境が充実していると考えられます。それに加えて、「いろいろな人に相談に行きました」とあるように、外部の専門家へのヒアリングも行っていることから、質の高いプログラムの実現に向けた努力があることが読み取れます。「毎回ドラマ」という言葉には、1つのアイデアが磨かれていく過程の試行錯誤の様が凝縮されていると推察されます。

プログラムの実施

プログラムを実施する際にミューザとして大切にしている基本的な考え方について、子どもたちを主な対象者としたプログラムの具体例を挙げながら会話が進む中、以下の通り、発言がありました。

ここは学校ではないというのは、みんなの念頭には入れていました。「学校だったら」というのは無しにして、学校でできないことをさせた方が良い、という成功体験みたいなものは意識していたかもしれません。

子どもを集めて子どもに企画させるのであれば、大人が考えたようなもののミニチュア版は作らない方が良いということ。大人が想像しないようなことをやらせてあげた方が良い。子どもをせっかく集めるのであれば普通のコンサートをしたらつまらないですよね。

枠組みをきちんと決めてあげないといけない。

「先生はやめよう」とフラットな感じで呼び方から定着をさせ、先生と呼ばれても、「同じ立場なんですよ」、「一緒に企画するんでしょ」という感じで接してました。

舞台での振る舞いについて経験の浅い子どもたちが相手だとしても、実施するからには舞台さんも 100%で迎えてもてなすので、「こっちもやんなきゃ！」という感じ。

ホールの人と来る人であれば、ホールの人は先生じゃないですよね。それで親しく

なろうとしたら、近所のお姉さんお兄さんぐらい。

ここからは大きく 3 つの視点を読み取ることができます。1 つ目は、ミューザの位置づけとして「ここは学校ではない」ということを明確にしており、学校ではできないことをする場所であり、そこでは成功体験を重ねていく場所であるという意識があるということです。2 つ目は、子どもだからこそできる活動をしたいという、子ども中心的で、子どもを尊重した活動が目指されており、その活動を支えるために大人が最低限の枠組みを決めていくという役割分担が読み取れる点です。3 つ目は、子どもたちとスタッフの関係性として、「フラットな感じ」が目指されているということです。特に、目指されている子どもたちとスタッフの関係性については、ミューザの職場の雰囲気とも関連が見られ、ミューザ全体として、お互いを尊重し、対等な立場で関わりあうことが目指されていると考えられます。

プログラムを実施したことで得られた成果については、具体例を挙げながら会話が進む中、以下の通り、発言がありました。

毎回のワークショップや会議があるたびに試行錯誤で、その都度、子どもたちへの接し方に関する議論がスタッフの中であり、それぞれに違う考え方をもっていました。それが一番大変だと感じました。コミュニケーションをしたという意味では、今までスタッフ同士でこんなに対話したことがないと思えるくらい対話を重ねたので、すごく良いと思う一方で、やはり考え方が異なるのでまとまりづらく、誰かがイニシアティブをとる必要があるためそれが大変でした。この大変さこそ、コミュニケーションの親密性を高めているとも思います。

あとはプログラムに関わる出演者、東京交響楽団さんとも積極的に会話するようになりました。スタッフとも会話するし、スタッフとジュニア・プロデューサーもするし、それが良い影響を与えて、普段オーケストラの公演があったときにも、「こんにちは」と挨拶が生まれたり。そういうのが良いなと思います。

私はインターンで最初にジュニ P[ジュニア・プロデューサー]に入って、それこそ A さんと B さん[ミューザ職員]が子どもと接してるのを見て、「あぁすごい良いな」って思い、それをずっと真似しています。「あ、こういう場があると良いな」とその時に初めて思って。ホールに人が通うってすごい良いなぁと思いました。

*[]内は文意の補足を行いました。以下同様。

私はなにかトラブルがあると、それを解決できた時の瞬間がすごい嬉しいです。一度、保護者の方から電話があり、その時は「うちの子の意見が反映されてないんですけど」という内容でした。その際、他のお子さんたちで同じ意見があればまとめて汲

み取っていく考えであること、また子どもたちの意見は全体的に把握していくように進めているんですよとお伝えしたら、「あぁそうですか」というお返事でした。だからといって、その子がその次から来なくなったわけでもない。その子がピアノが弾けると言っていたので、合唱をすることになったとき、その子がピアノの伴奏をすることになり、そしたらその子にとってとてもやり甲斐があったのか、その年のジュニア・プロデューサーは最後までやり遂げて終わってくれ、その後も何か公演に付随する指揮者とのレクチャー等にも参加してくれて、「あぁ良かった」と思いました。それっきりもうさようなら、というわけではなくて、その子が続けてくれたことがすごい嬉しくて、そういう時に、やってて良かったなと思いました。その後も続けてくれるというのがとても嬉しいです。

目立ちたがりの子が順応といいますか、みんなで決めたことをグループの中で一緒に取り組むことができているのを見ると、「あぁ、こういうとこに来てもらえて良かったのかな」ということは感じます。

他の事業におけるの子どもとの接し方も、やはりジュニア・プロデューサーで土台ができた。

「受験で役立ちました」、「合格しました」と言ってくれる子もいました。新聞記事になったりもすることから、それを記録として提出することで推薦の実績になるなど、「あぁこういうの役に立つんだ」と思いました。

これらの発言から、まず 3 つの点でプログラムの実施が職場環境への良い影響をもたらしていることを整理しました。具体的には、ワークショップ等の実施に伴い試行錯誤を重ねるからこそスタッフ間のコミュニケーションの充実に繋がっていったこと、尊敬できる同僚の働きから学びを得つつ、子どもたちの成長も実感として感じることのできるようなスタッフの良質な研修機能を果たしていること、子どもとの接し方についてミューザとしての土台構築がなされていったことに整理しました。その他、プログラムの実施によって参加者との継続的な関係性の構築がなされている点も確認されました。活動終了に伴い、参加者とホールとの関係性が切れてしまうのではなく、活動終了後も参加者が自身の近況を報告しに来るような関係性の構築が見られたことはプログラム実施の成果と考えられます。

c. まとめ

ここでは、ミューザのスタッフ 5 名に対するグループインタビューから、「企画から実施に至るまでの流れ」と「プログラムの実施」の大きく 2 つに注目し、発言の抽出と読み取りを整理しました。インタビューで得られた読み取りを図化したものが以下になります

（図 2-1）。

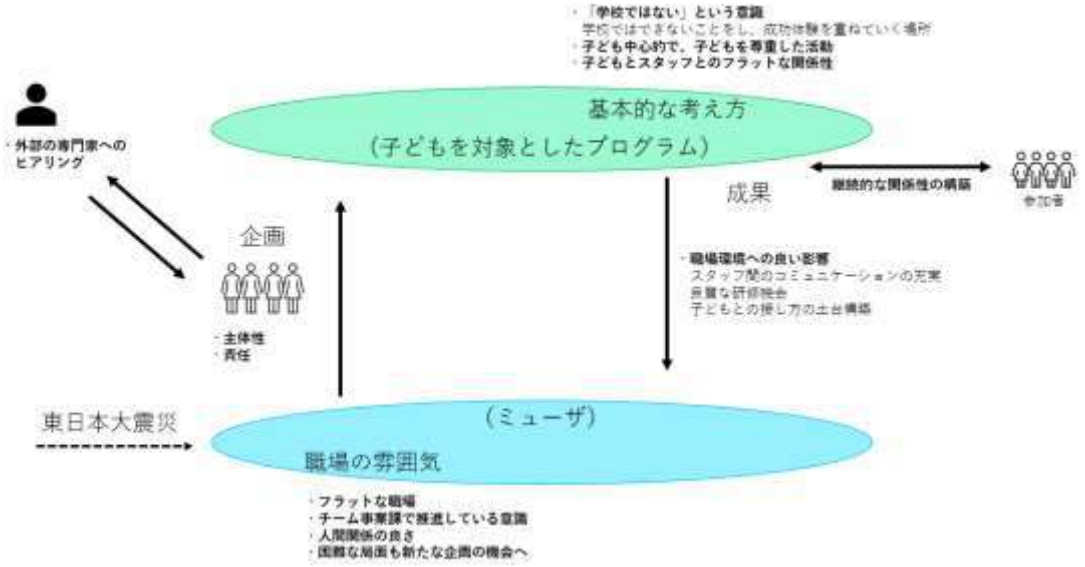


図 2-1：ミューザスタッフを対象としたグループインタビューの整理

「企画から実施に至るまでの流れ」については、職場の雰囲気（フラットでチーム事業課という意識をもち、人間関係が良好で、困難な局面も新たな企画の機会にできる）に支えられ、スタッフが主体性と責任のバランスを取りながらも自由な企画立案を行い、ミューザ内部での検討のみならず、外部の専門家へのヒアリングを通して質の高いプログラムの実現に向けた努力があることが整理されました。「プログラムの実施」については、子どもを対象としたプログラムについては、「『学校ではない』という意識」、「子ども中心的で、子どもを尊重した活動」、「子どもとスタッフとのフラットな関係性」という基本的な考え方のうえで実施され、その成果として、「スタッフ間のコミュニケーションの充実」や「良質な研修機会」、「子どもとの接し方の土台形成」といった職場への良い影響が認められ、また参加者との継続的な関係性の構築がなされていることも確認されました。

ミューザは、特に子どもを対象としたプログラムにおいて、学校ではできないことを行うという意味で、公共ホールとしての自覚を柱としたプログラム実施を行っていると考えられ、またプログラムの実施によって職場環境への良い影響もみられることから、「プログラムの実施➡職場環境の充実➡新しい企画の立案➡プログラムの実施…」という循環が推察されます。ミューザのスタッフへのインタビューからは、プログラムの実施によって公共ホールとしての役割を果たしながらも、ミューザ内の職場環境の質向上へ寄与している可能性が示唆されました。

3. 保護者へのインタビュー

ここでは、これまでにミューザのプログラムに参加したことのある子どもを持つ保護者を対象としたインタビューを通して、ミューザのプログラムが子どもにどのような学びをもたらしたのか、その可能性を見ていくことにします。

この報告においては、特に「オルガンレッスンわたしもぼくもオルガニスト―」（以下、「オルガンレッスン」。）とジュニア・プロデューサーの活動に注目することとし、その活動概要は以下の通りです[12]。

オルガンレッスンわたしもぼくもオルガニスト―

オルガンをもつホールとして、オルガン界を支える人材育成を目的にスタートしました。ピアノ経験者を募り、オルガンを体験レッスンする短期コースと、より専門的な内容に踏み込む長期コースを実施。音楽家としての在り方を学び、未来のオルガン界、音楽界を担う人材の育成を目指しています。レッスンではホールオルガニストが直々に指導します。また、優秀な修了生には、ミューザで開催されるコンサートにオルガニストとして出演する機会も与えられます。

ジュニア・プロデューサー

一般公募で集まった川崎市内小学 4 年生～6 年生 12 名が、コンサート当日まで仲間とアイディアを出し合い、企画したり、チラシを作ったり、運営したりするプログラムです。一般的なお仕事体験にとどまらず、自ら考え、異なる意見をまとめていきながら、一つのコンサートを作り上げます。

[12] 「コミュニティ・プログラム　わくわくミューザ 2018-2019 実施報告書」より引用。

a. 方法

これまでにミューザのプログラムに参加したことのある子どもをもつ保護者計16組を対象に、個別インタビューを実施しました。インタビューは2019年10月29日から11月30日の間、1回45分程度、場所はミューザ内の会議室もしくはインタビュー協力者の指定した場所にて行いました。インタビューに際しては、事前に、子どもがミューザのどのプログラムに参加経験があるのか、子どものこれまでの習いごと等[13]の経験を記入するためのシートを郵送し、インタビュー時に回収しました。全ての回において、質問者は小田（東京学芸大こども未来研究所）と森（ミューザ）が担当し、質問事項はあらかじめ用意の上、当日のインタビューの進み具合に応じて柔軟な進行を行っていくインタビュー方法を採用しました（半構造化面接）。保護者の方には、インタビューのはじめに調査の目的を説明し、個人情報の取扱いに関して同意を得たうえで録音を行いました。

シートからは、回答者の年齢、性別、オルガンレッスンとジュニア・プロデューサーに参加経験のある子どもの人数、習いごとについて整理、考察を行いました。インタビューでの発言は、オルガンレッスンとジュニア・プロデューサーに参加経験のある子どもを持つ保護者との会話について文字起こしを行った後、プログラムごとに注目する視点（オルガンレッスンでは「気づき」、ジュニア・プロデューサーでは「意識の変化」）を設定して、その体験的価値の整理を試みました。

b. 結果と考察

①シートからの読み取り

インタビュー協力者について、平均年齢は46.8歳、男性は2名（12.5%）、女性は14名（87.5%）でした。オルガンレッスンとジュニア・プロデューサーに参加したことのある子どもの人数は、オルガンレッスンが4名、ジュニア・プロデューサーが11名でした。

また、インタビュー協力者の子どもの習いごと等の経験を「音楽に関する経験」と「音楽以外の経験」に分けて整理したところ、以下の結果となりました（表3-1-1）。

音楽に関する経験				
ピアノ	声楽	オルガン	リトミック	エレクトーン
作曲	吹奏楽	合唱		
音楽以外の経験				
スイミング	バレエ	絵画	英語	バトントワリング
茶道	演劇	習字	相撲	ベビーサイン
体操教室	塾	馬術部	記者	文化プログラムプレスセンター
サッカー	陸上	そろばん	テニス	サイエンス教室

[13] ここでは学校での授業以外の個別的、継続的な経験を意味しており、楽器等の専門的なレッスンや地域のサークル活動、学校におけるクラブ活動等を指しています。

剣道	作文	空手	チアダンス	ヒップホップダンス

表 3-1-1：インタビュー協力者の子どもの習いごと等の経験

さらに、オルガンレッスンとジュニア・プロデューサーに参加した子どもたちについて、「音楽に関する経験」のみをしている子どもの数と「音楽以外の経験」のみをしている子どもの数、両方を経験している子どもの数を調べた結果、以下の結果となりました（表 3-1-2）。

	オルガンレッスン	ジュニア・プロデューサー
音楽に関する経験のみ	0	1
音楽以外の経験のみ	1	4
両方を経験	3	6

表 3-1-2：プログラム別に見たインタビュー協力者の子供の習いごと等の経験

ここから、まず「音楽に関する経験」が 8 種類に対して、「音楽以外の経験」は 25 種類見受けられたことから、音楽のみならず、音楽以外にも多様な経験をしている子どもたちがミューザのプログラムに参加していることが確認されました。また、オルガンレッスンならびにジュニア・プロデューサーでは、「音楽に関する経験」と「音楽以外の経験」の両方を経験している子どもが最も多い結果となりましたが、特にジュニア・プロデューサーについて、11 人中 4 人（約 36%）の子どもが習いごと等については「音楽以外の経験」のみであったことから、「音楽に関する経験」をしていない子どもでも関心をもって参加できるプログラムであることが見て取れます。

②オルガンレッスン

オルガンレッスンに参加したことのある子どもを持つ保護者とのインタビューのうち、プログラム中に子どもたちが経験したと予測される「気づき」に着目をした結果、大きく２つの気づきが抽出されました。以下、それぞれの気づきと、発言を示します。

「オルガンへの気づき」

・音が鳴る！って、すごい印象的で、ピアノだって鳴るじゃんって思ったんですけど、音が鳴ってんだよってすごい言っていて、持続するっていうのをすごく驚いたし、木のポジティフだったので、意外と大きい音が鳴っているとか、そういうのがすごく驚き。
・思ったよりこんなに軽かったんだとか、タッチの違いって言うんですかね。
・足鍵盤を中１でやらせてもらえることになった時はすごく楽しみで、足鍵盤楽しみだって、ピアノには絶対にないものなので。

「仲間への気づき」

・ライバルがいるって言うことを知るっていうか、とても人の演奏に興味を示して。
・〇〇君に今回会えるのを楽しみにしていて、すごいお上手だし、そういうことで刺激を受けるということを学ばせてもらったと感じています。
・自分 1 人だけが頑張ってるんじゃないかっていうのが、実は違うんだ、みんなそうなんだっていう。

その他、以下の気づきも認められました。

「ズレへの気づき」
・自分で弾いてたり思っているのと音や姿勢が違うみたいなんですね。だから撮っておいてほしいみたいで。自分はこうやって思って弾いてるけれど、客席でお客さんが聴いたときはどう鳴っているのか、そのズレを知りたいみたいで。

「ホール環境への気づき」
・自分で練習するときは[大ホールが]広いからちょっと怖いってドキドキしてました。

*[]内は文意の補足を行いました。

「オルガンへの気づき」では、音の大きさやタッチの軽さ、足鍵盤があることなど、オルガンという楽器の特性に関する気づきがあったことが読み取れます。「仲間への気づき」では共に高めあえるライバルの存在や、そのような存在から刺激を受けるということ、また頑張っているのは自分だけではないという気づきがあったことが読み取れます。さらに、「ズレへの気づき」では、自分の思っていることと他者から見える姿にズレがあることへの気づき、「ホール環境への気づき」では、練習するときにはホールが広く、怖く感じたという気づきが挙げられました。

なお、今回の分析対象とした発言の中では「違う」という言葉の使用が散見され（分析対象とした 204 の文章中、19 回の使用）、その視点からもう一度発言全体を見直すと、「タッチの違い」、「自分 1 人だけが頑張ってるんじゃないかっていうのが、実は違うんだ」、「自分で弾いてたり思っているのと音や姿勢が違う」というような直接的に「違う」という言葉を使用するほかにも、「意外と大きい音が鳴っている」、「思ったよりこんなに軽かった」、「ピアノには絶対にないもの」というような、「思っていたものと違う」というイメージのズレを表す言葉の使用が認められ、「自分で練習するときは[大ホールが]広いからちょっと怖い」では、いつもは怖いと感じないホールが、自分で練習するときには怖く感じたという「違い」という概念を感じさせる言葉の使用も見受けられます。つまりは、「違う」という視点をキーワードとしながら、子どもたちは多様な気づきを重ねていったと考えられます。同時に、「大ホール」で「オルガン」を弾くことのできるこのプログラムの特性が、「違う」という視点から多様な気づきを子どもたちに誘発するための効果的なギミックになっているとも推察されます。

以上のことから、オルガンレッスンのプログラムにて、子どもたちは「オルガンへの気づき」や「仲間への気づき」の他、「ズレへの気づき」、「ホール環境への気づき」の4つの気づきを得ていた可能性が示唆されました。また、これらの気づきが得られるきっかけとして、「違う」という視点が1つのキーワードとなっている可能性、またプログラムの特性として、子どもたちが「違う」という視点から多様な気づきを得やすい環境が整っていることが推察されました。

③ジュニア・プロデューサー

ジュニア・プロデューサーに参加したことのある子どもを持つ保護者とのインタビューのうち、プログラム中に子どもたちが経験したと予測される「意識の変化」に着目をした結果、プログラムの場面ごとに以下のような発言が抽出されました。

「ホールへの移動」

・下の子が 5 歳離れているので、幼稚園の都合があったりとか、なかなか連れてくのが大変な時があって、「じゃあ 1 回頑張ってお願い」って言って。その時[電車が]遅延したんですよ。初回で。あはは。電車が止まって遅延して。で、「すごい人たちが動いたと思ったらすごい人たちが乗った電車が来て」って言って、1 本乗れなくって、それが初回。大冒険して。あはは。でも逆にそれでいけたから、もう**自信**がついて、[電車が]動いてるなら行けるっていう風になって、それからほぼほぼ1人で。

「係選び」

・広報係に属していたんですけど、その広報係で今度パンフレットを配らなくちゃいけなくて、配布の方法をどうしようかとかそういう具体的なことを[悩んでいました]。そもそも本当は他の係がやりたいっていう風に思っていたみたいなんですけど、すごく希望者が多くって、「みんなやりたいから、私は広報でもいいと思うから、広報は希望する人が少なかったから、そっちにした」っていう風に最初こう言ってて。[中略]「[活動の最終日は]今日で最後なんだー」みたいになってて、もうこの活動がこれで最後なんだっていうことをすごく残念がってましたね。[中略]「残念。もっとやりたかった。なんで5年生の時にもやらなかったんだろう」みたいに言ってて。すごく言ってましたね。

「仲間と一緒に考える」

・[プログラム中は]発言しなきゃいけない時が多々あったのでのですが、説明がとても下手なんですよ。だから、言いたいことを伝えたいんだけど、うまく伝えられなくて。[中略]「なんか発言しなきゃいけないんだけど、うまく説明できるかなー」って言われたから、「じゃあ、説明がうまくいかないかもしれないからそしたらみなさんに、助けてくださいね、って先に言っといたら」って言って。で、それを実際に言って、「やっぱり上手に言えなかったら、隣のお友達が助けてくれたからね、ちゃんとだからね、うまく

いったよ」って言ってましたね。

・誰かと誰かの意見が対立しているっていうんじゃないですけど、真反対の意見をどうしたらいいかっていうところ。あんまり自己主張を人にする人ではないので、どっちかっていうと人の[意見]を聞いて「どうしましょうか」っていう。それをなんかこううまくまとまる方法はないかなってのは考えていたところが多分あって。[中略] まとまったらスッキリして帰って来るというか。「こういう風になってたけど、それどうしたの？」なんていうと[中略]1 回、2 回じゃ決まらなかったような気がするんですよね。いくらだったらお客さんが満足するか。やっぱ高くしたいお子さんと、もっと低くしたいお子さん。いろいろ、そこは、あるみたいで。

[ ]では文意の補足、[中略]では発言内容の一部省略を行いました。以下同様。

「ホールへの移動」では、電車に 1 本乗り遅れるようなトラブルがありながらもホールに到着できたこと、「係選び」では、最初は希望する係りになれなくとも最後には「もっとやりたかった」と思えたこと、「仲間と一緒に考える」では、上手に説明できないときにお友達が助けてくれたからうまくいったこと、仲間の意見をまとめる方法に苦労しつつもまとまったらスッキリすることが、「意識の変化」として確認されました。

さらに、プログラムを通して得られた子どもの学び、成長に関する保護者としての意見を抽出した結果、以下の発言が抽出されました。

・教室の中で、パッと手を上げて言うとかいうのは出来ないタイプの人なんですけど、今でもそんなに得意ではないかもしれないんですけど、過去に比べるとこのミューザっていうのを経験して、みんなの前での発言っていうのに、少し抵抗がなくなったっていうのは私も思いますし、本人もそうやって言ってました。みんなの前で言うことも別に大丈夫になったって。[中略]自信が多分ついたのかな。やっぱり学校の知ってる人の中ではちょっと手あげにくかったけど、このミューザに来て、全然知らない子たちと話し合ったりとか、意見を言う経験ができて、「あーなんか、こうやっていればいいんだ」ってわかったのかなーって。ちょっと思って。良かったなあと私も思ってます。

・この経験ってすごい、なんやろ自分の中で自信につながったところもあるし、学校でこの後 60 周年の式典があったりした時も、すごく前に出て一生懸命やってたんですね。

・人前に出るのが、多分これのおかげで好きになったので、中学校入ってすぐはわけわかんなかったんでやらなかったんですけど、後期は学級委員やるって。[中略]前へ前へ出て行こうっていう気持ちになれてるのは、たぶん、皆といろんなもの作って、最後は司会までやらせてもらってっていう、あのやりきった感というか誇りというか自信というか、それのおかげはおっきいかなって思ってますね。

・自信がついたっていうことは、あると思う。もちろん、交通機関の行き来はそうですけど、それ以外に、ひとりも同じ学校の子いなかったので、全く知らない、学年も違うお子さん達と、ひとつのことを成し遂げた達成感と、あとやっぱり自信がついたっていう

こと。あと知らない大人の人。ここにいる職員さん達ともたくさん関わりを持って。で、いろんな意味で自信が[ついた]ってのはすごく家族中で感じてたっていうか。

プログラムを通して得られた子どもの学び、成長に関する保護者としての意見からは「自信」という言葉が複数人から挙げられ、特徴的と言えます。この「自信」を形成していった可能性のある視点としては、「全然知らない子たちと話し合ったりとか、意見を言う経験」、「全く知らない、学年も違うお子さん達と、ひとつのことを成し遂げた達成感」、「職員」との関わり、「交通機関の行き来」が挙げられました。

「自信」について、高井（2011）の研究では「自分の在り方に自信をもっている感覚、あるいは、自分に対して自信をもって生きていると感じられていること」を「自信感」として、これは「対人関係を含め、生き方態度に大きく影響するもの」としています[14]。先述の保護者の発言は、この自信感を指していると推察され、その意味において、このプログラムを通して子どもたちは自信感が育まれていったと考えられます。「ホールへの移動」、「係選び」、「仲間と一緒に考える」場面、そして全く知らない、学年も違う仲間と１つのことを成し遂げ、仲間や保護者、ホール職員が関わりあうこと、その各々が子どもたちの自信感の醸成を支えるギミックとして有益に機能した可能性が示唆されました。

以上のことから、ジュニア・プロデューサーでは、プログラムが持ついくつかの場面や、そこに関わりあう多様な人によって子どもたちの中に自信感の育みをもたらす可能性が整理されました。

c. まとめ

ここでは、これまでにミューザのプログラムに参加したことのある子どもを持つ保護者計 16 組を対象としたインタビューを通して、ミューザのプログラムが参加した子どもにどのような学びをもたらしたのか、その可能性を見ていきました。

インタビューに際して、保護者に事前配布したシートからは、音楽のみならず、音楽以外にも多様な経験をしている子どもたちがミューザのプログラムに参加していることが示唆されました。また、オルガンレッスンならびにジュニア・プロデューサーでは、「音楽に関する経験」と「音楽以外の経験」の両方を経験している子どもが最も多い結果となった一方で、特にジュニア・プロデューサーについては 11 人中 4 人（約 36%）の子どもが習いごと等については「音楽以外の経験」のみであったことから、「音楽に関する経験」をしていない子どもでも関心をもって参加できるプログラムであることが見て取れます。

オルガンレッスンに参加したことのある子どもをもつ保護者の方へのインタビューからは、子どもたちはプログラムを通して、「オルガンへの気づき」や「仲間への気づき」の他、「自分への気づき」、「ホール環境への気づき」の４つの気づきを得ていた可能性が

[14] 「自信感形成要因および自信感の発達的変化―青年期から高齢期を対象として―」（高井, 2011, 健康心理学研究 Vol.24, No. 1, p45）

示唆されました。また、これらの気づきが得られるきっかけとして、「違う」という視点が１つのキーワードとなっている可能性、さらにはプログラムの特性として、子どもたちが「違う」という視点から多様な気づきを得やすい環境が整っていることが挙げられました。

ジュニア・プロデューサーでは、「ホールへの移動」、「係選び」、「仲間と一緒に考える」場面、そして全く知らない、学年も違う仲間と１つのことを成し遂げ、仲間や保護者、ホール職員が関わりあうこと、その各々が子どもたちの自信感の学びを支えるギミックとして有益に機能した可能性が示唆されました。

これらのことから、ミューザは、オルガンレッスンのような音楽の専門性を深めることのできるプログラムのほか、ジュニア・プロデューサーのような音楽経験のない子どもでも音楽に深くかかわることのできるプログラムを提供していると考えられます。

４．まとめとこれから

まとめ

ミューザは「音楽のまち・かわさき」の中心施設として音楽を活用したまちづくりを推進すべく、2004 年以降、コミュニティ・プログラムを継続的に実施してきました。本報告書では、そうしたコミュニティ・プログラムの成果を、大きく 3 つの視点から整理しました。

「１．2004 年度から 2019 年度に実施したコミュニティ・プログラム」では、開館以降実施した 148 のプログラムを対象として、5 つの視点からその特徴を見てきました。ここでは、2004 年から 2019 年を 3 つの期（2004 年から 2010 年を第Ⅰ期、2011 年と 2012 年を第 2 期、2013 年から 2019 年を第Ⅲ期）に分け、第Ⅰ期（震災前）と第Ⅲ期（震災後）の比較を通してコミュニティ・プログラムの変遷を見ていきました。その結果、第Ⅲ期が第Ⅰ期と比べて、次の 4 つの点で特徴的であることが確認されました。１）第Ⅰ期と比べて第Ⅲ期のプログラム実施数の平均が 2 倍以上の値になっており、第Ⅲ期において多様なプログラムを提供することでより多くの方と関わりあう機会を持ちたいという意識が表れている可能性が挙げられること、２）「５つのねらい」について、第Ⅰ期と比べて第Ⅲ期では特に「シビックプライドの醸成」、「ホールの役割」、「活動を通した学びの場」を活動の目的に含むプログラム実施数の高さが特徴的であり、これは「音楽のまち・かわさき」のシンボルとしての機能を果たすこと、公共ホールとしての役割を果たすこと、豊かな学び体験を提供していくことの意識がミューザ内で高まっていったことが反映されている可能性が考えられること、３）プログラムの実施を担う人材について、第Ⅲ期にて「企画部スタッフ」がプログラム実施の中心的存在でありつつも、それに続いて「外部アーティスト」、「連携先」がプログラム実施を担っていくというスタイルが確立されたことから、ミューザは外部人材との積極的な連携の上でプログラムを実施していくという意識が可視化されたこと、４）活動内容について、「間接的な音楽活動」の位置づけが第Ⅰ期と大きく変化したことは特徴的であり、ミューザは音楽作品や楽器に関する解説を行うという公共ホールならではの専門性を発揮した活動内容のみでなく、「学び合い」という、参加者とアーティスト、また参加者同士がお互いを尊重し、対等な立場での主体的な意見交換を行うことで生まれる関係性の創出へも意識が向いていることが考えられます。

「２．職員へのインタビュー」では、職員 5 名へのインタビューを通して、コミュニティ・プログラムの「企画から実施に至るまでの流れ」と「プログラムの実施」についてその特徴を整理しました。「企画から実施に至るまでの流れ」については、職場の雰囲気（フラットでチーム事業課という意識をもち、人間関係が良好で、困難な局面も新たな企画の機会にできる）に支えられ、スタッフが主体性と責任のバランスを取りながらも自由な企画立案を行い、ミューザ内部での検討のみならず、外部の専門家へのヒアリングを通して質の高いプログラムの実現に向けた努力があることが確認されました。「プログラムの実施」については、子どもを対象としたプログラムについては、「『学校ではない』と

いう意識」、「子ども中心的で、子どもを尊重した活動」、「子どもとスタッフとのフラットな関係性」という基本的な考え方のうえで実施され、その成果として、「スタッフ間のコミュニケーションの充実」や「良質な研修機会」、「子どもとの接し方の土台形成」といった職場への良い影響が認められ、また参加した子どもとの継続的な関係性の構築がなされたことが整理されました。ここから、ミューザは特に子どもを対象としたプログラムにおいて、学校ではできないことを行うという意味で公共ホールとしての自覚を柱としたプログラム実施を行っていること、またプログラムの実施によって職場環境への良い影響もみられることから、「プログラムの実施➡職場環境の充実➡新しい企画の立案➡プログラムの実施…」という循環が特徴として整理されました。

「3．保護者へのインタビュー」では、プログラムを通して子どもたちにどのような学びを提供できた可能性があるのか、3つの視点から整理を行いました。1 つ目として、インタビュー協力者に回答依頼をした「子どもたちの習いごとの経験」からは、音楽のみならず、音楽以外にも多様な経験をしている子どもたちがミューザのプログラムに参加していることが確認されました。また、さらにオルガンレッスンならびにジュニア・プロデューサーに参加経験のある子どもに着目した場合、「音楽に関する経験」と「音楽以外の経験」の両方を経験している子どもが最も多い結果となった一方で、特にジュニア・プロデューサーについては 11 人中 4 人（約 36%）の子どもが習いごと等については「音楽以外の経験」のみであったことから、「音楽に関する経験」をしていない子どもでも関心をもって参加できるプログラムであることが示唆されました。2 つ目として、オルガンレッスンに参加したことのある子どもをもつ保護者へのインタビューからは、子どもたちはプログラムを通して、「オルガンへの気づき」や「仲間への気づき」の他、「自分への気づき」、「ホール環境への気づき」の4つの気づきを得ていた可能性が示唆されました。また、これらの気づきが得られるきっかけとして、「違う」という視点が1つのキーワードとなっている可能性、さらにはプログラムの特性として、子どもたちが「違う」という視点から多様な気づきを得やすい環境がプログラム内に整っていることが挙げられました。3 つ目として、ジュニア・プロデューサーに参加したことのある子どもをもつ保護者へのインタビューからは、「ホールへの移動」、「係選び」、「仲間と一緒に考える」場面、そして全く知らない、学年も違う仲間と1つのことを成し遂げ、仲間や保護者、ホール職員が関わりあうこと、その各々が子どもたちの自信感の学びを支えるギミックとして有益に機能した可能性が示唆されました。

以上を総合し、ミューザは2004年の開館以降、様々な社会情勢に即したコミュニティ・プログラムを提供し続け、それに伴う関係人口の増加ならびに関わり合いの質の多様さを通して、「音楽のまち・かわさき」の中心施設としての役割を果たしてきたことが整理されました。また、コミュニティ・プログラムの実施が、プログラムの対象者のみならず、職場環境への良質な影響をもたらしていることから、コミュニティ・プログラムの実施がミューザの取組全体に対して持続可能なエネルギーをもたらし、コミュニティ・プログラムに留まらない豊かなメリットの循環をもたらしていることが確認されました。

これから

公共ホールが自らその機能を強化していくために、公共ホール自身による主体的な自己点検の必要性が言われています[15]。これについて、ホールの特性を考慮に入れた自己点検ツールの活用が可能になれば、ホールがその地域において果たしたいと考えている社会的貢献も視野に入れた自己点検が可能になり、戦略的に地域と関わり、状況に応じて役割を更新していくこともできると推測されます。そこで、ミューザにおいては「1．2004 年度から 2019 年度に実施したコミュニティ・プログラム」中、「b. 結果と考察　②5つのねらい」にて着目した通り、「5つのねらい」にはミューザとしてコミュニティ・プログラムを通して果たしたい使命が集約されていることから、これを活用した自己点検ツールの開発可能性が示唆されました。

試験的に、2004 年から 2010 年（第Ⅰ期）ならびに 2013 年から 2019 年（第Ⅲ期）における、各ねらいが含まれるプログラム実施数の平均からレーダーチャートを作成した結果、次のようになりました（表 4-1）。

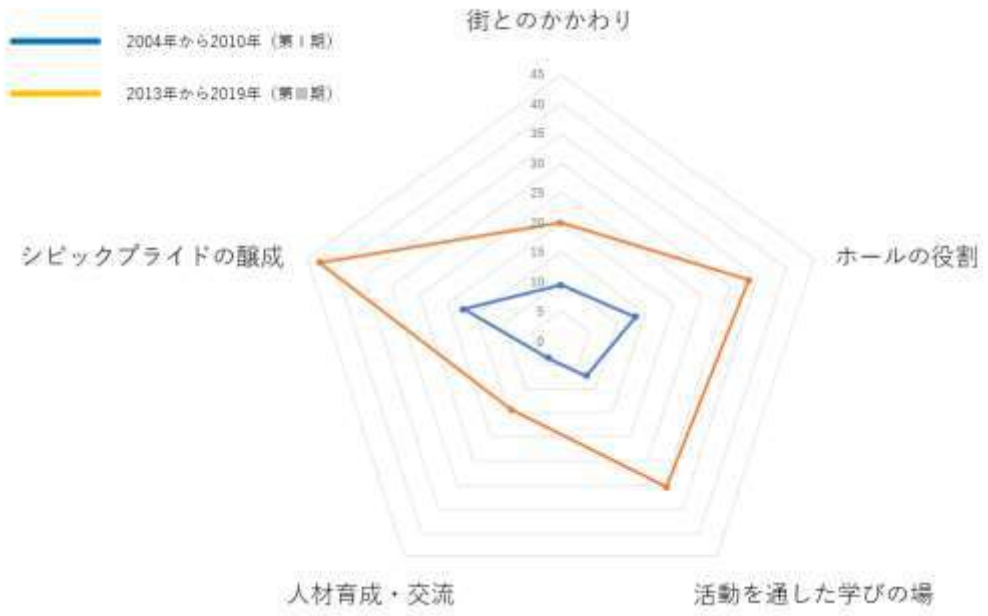


表 4-1：第Ⅰ期ならびに第Ⅲ期における各ねらいが含まれるプログラム実施数の平均

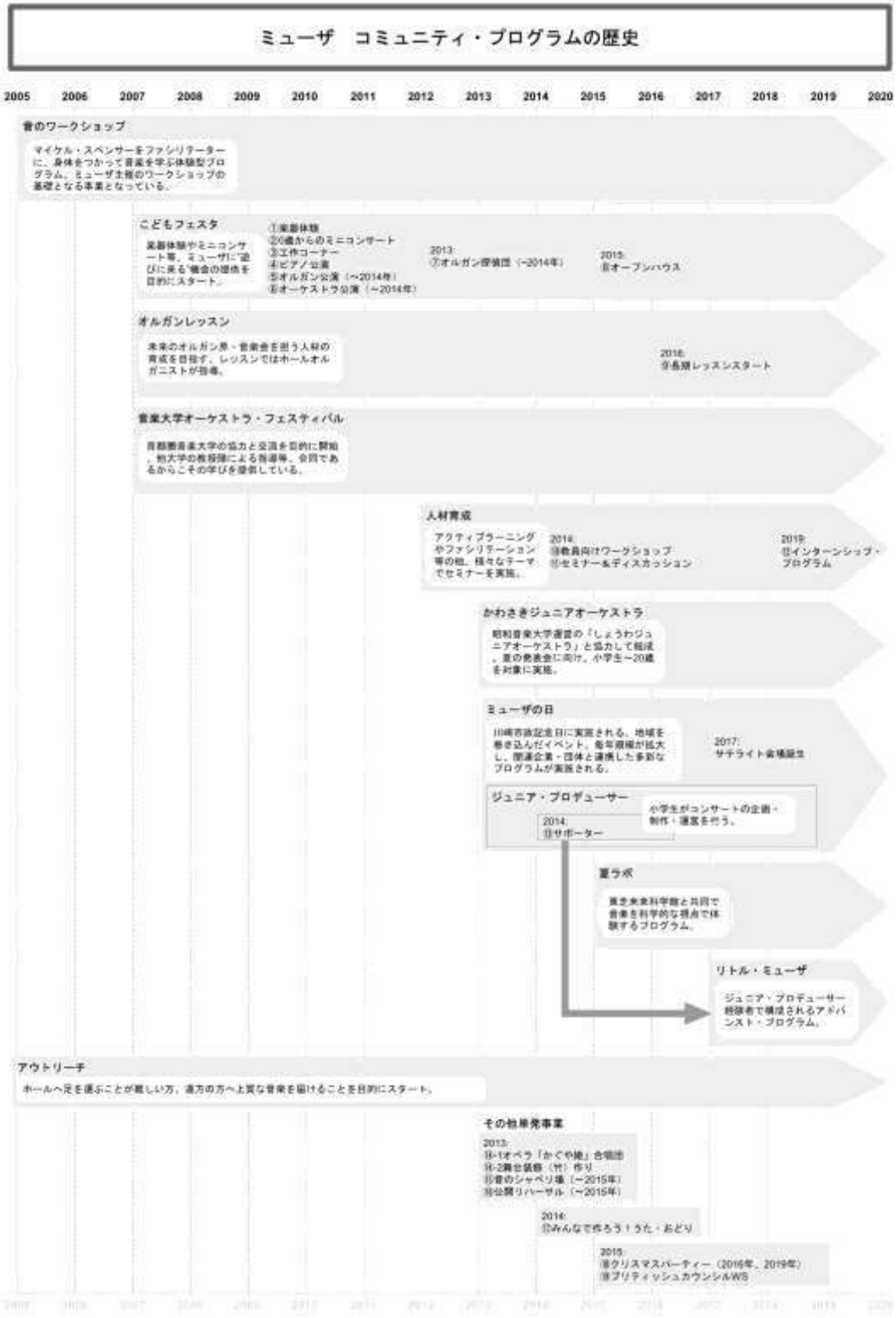
表 4-1 では、第Ⅰ期と第Ⅲ期のプログラム実施数の平均値をもとに作成しましたが、毎年

[15] 独立行政法人日本芸術文化振興会の HP では、「助成対象活動の評価について」中、「事後評価」の中で、「助成の対象となる活動の実施が国の文化芸術政策の目的の実現につながったかどうか、劇場・音楽堂等自らが評価を行って改善を図り、ＰＤＣＡサイクルを十分に機能させていくことが求められています」としています。

度、このレーダーチャートを作成し、その変遷を見ていくことで、「ミューザらしさ」というホールのアイデンティティを可視化し、確認できる可能性が考えられます。

ここではミューザの「これから」を考えるにあたって、自己点検ツールの一つの可能性を示唆したに留まりますが、このようなミューザの特性を鑑みた自己点検を通して、今後、戦略的にミューザのコミュニティ・プログラムが展開されていくことが期待されます。

参考資料


ミューザ　コミュニティ・プログラムの歴史
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
音のワークショップ
マイケル・スペンサーをファシリテーターに、身体をつかって音楽を学ぶ体験型プログラム。ミューザ主催のワークショップの基礎となる事業となっている。
こどもフェスタ
楽器体験やミニコンサート等、ミューザに"遊びに来る"機会の提供を目的にスタート。
①楽器体験
②0歳からのミニコンサート
③工作コーナー
④ピアノ公演
⑤オルガン公演（～2014年）
⑥オーケストラ公演（～2014年）
2013:
⑦オルガン探検隊（～2014年）
2015:
⑧オープンハウス
オルガンレッスン
未来のオルガン界・音楽会を担う人材の育成を目指す。レッスンではホールオルガニストが指導。
2016:
⑨長期レッスンスタート
音楽大学オーケストラ・フェスティバル
首都圏音楽大学の協力と交流を目的に開始。他大学の教授陣による指導等、全員であるからこその学びを提供している。
人材育成
アクティブラーニングやファシリテーション等の他、様々なテーマでセミナーを実施。
2014:
⑩教員向けワークショップ
⑪セミナー＆ディスカッション
2019:
⑫インターンシップ・プログラム
かわさきジュニアオーケストラ
昭和音楽大学演奏の「しょうわジュニアオーケストラ」と協力して組成。夏の発表会に向け、小学生～20歳を対象に実施。
ミューザの日
川崎市設定記念日に実施される、地域を巻き込んだイベント。毎年規模が拡大し、関連企業・団体と連携した多彩なプログラムが実施される。
2017:
サテライト会場誕生
ジュニア・プロデューサー
小学生がコンサートの企画・制作・運営を行う。
2014:
⑬サポーター
夏ラボ
東芝未来科学館と共同で音楽を科学的な視点で体験するプログラム。
リトル・ミューザ
ジュニア・プロデューサー経験者で構成されるアドバンスト・プログラム。
アウトリーチ
ホールへ足を運ぶことが難しい方、遠方の方へ上質な音楽を届けることを目的にスタート。
その他単発事業
2013:
⑭-1オペラ「かぐや姫」合唱団
⑭-2舞台装飾（竹）作り
⑭音のシャベリ場（～2015年）
⑭公開リハーサル（～2015年）
2014:
⑮みんなで作ろう！うた・おどり
2015:
⑯クリスマスパーティー（2016年、2019年）
⑰ブリティッシュカウンシルWS

参考文献等

川崎市総合計画　第 2 期実施計画
https://www.city.kawasaki.jp/170/page/0000096459.html

第 2 期　川崎市文化芸術振興計画（改訂版）（2019）
https://www.city.kawasaki.jp/250/cmsfiles/contents/0000001/1384/keikaku2(kaitei).pdf

ミューザ川崎シンフォニーホール　リニューアルまでのあゆみ
https://www.kawasaki-sym-hall.jp/special/renewal2013/history/

ミューザ川崎シンフォニーホール（2019）
「コミュニティ・プログラム わくわくミューザ 2018-2019 実施報告書」

高井範子（2011）
「自信感形成要因および自信感の発達的変化―青年期から高齢期を対象として―」
『健康心理学研究』24, pp.45-58.

東京学芸大学附属世田谷小学校（2018）
『自分の学びに自信がもてる子ども』東洋館出版社

独立行政法人日本芸術文化振興会
「助成対象活動の評価について」より「事後評価」の項
https://gekijo-ongakudo.ntj.jac.go.jp/hyouka/

－　実施体制　－

推進チーム

ミューザ川崎シンフォニーホール	山田　里子
	森　　文子
	藤井　佳依
	兼澤　祐衣
	今井　佐知子
	富樫　多紀
東京学芸大こども未来研究所	小田　直弥（文責）

実施協力

東京学芸大学	森尻　有貴先生

インタビューにご協力いただいたご家族の方

おわりに

本報告書作成にあたり、調査等に快くご協力くださいました方々に心から感謝申し上げます。

今、報告書の完成を迎える一方で、世界ではパンデミックが発生し、日本でも強くその影響が出始めているところです。これまでの公共ホールは人々が集い、音楽に触れあいながら多様な人との交流機会を創出する「つながり」を提供してきた一方で、集い、顔を合わせて語らうことが制限される事態になっています。演奏家はオンラインを活用して、自身の演奏を発信し始める姿も見られ、音楽愛好家はとまどいながらもオンライン演奏会を試す中、ホールでしか味わえなかった「体験」の再認識が進んでいるように感じます。興味ある演奏会のチケットを購入し、当日、どんな服を着ていこうか、演奏会前にはホール近くのカフェでちょっと一息入れ、わくわくしてホールに行き、チケットを渡し、プログラムをもらい、席に座り、開演の時を迎える。終演後には、演奏会の余韻に包まれながら特別な帰路につき、また日常がやってくる。そのような揺るがないと信じていた当たり前が、一時的に失われたことの大きさを感じずにはいられません。

ミューザのコミュニティ・プログラムは、このような危機感を共に感じることのできる関係人口の拡大に寄与し、これからの音楽の在り方を一緒に考えていくことのできる心強い仲間を増やしてくれたと感じています。ミューザがこれからも「音楽のまち・かわさき」の象徴として、たくさんの人の想いと音楽が交わり、響き合う場所として輝き続けることを願っています。

東京学芸大こども未来研究所
小田直弥